第 52 回日本毒性学会学術年会 参加報告

大阪医科薬科大学　薬物治療学 1 研究室
水口 芹奈、髙垣 春奈

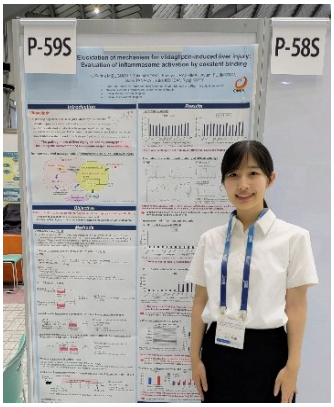
2025 年 7 月 2 日から 4 日の 3 日間にわたり、沖縄コンベンションセンターにて開催された第 52 回日本毒性学会学術年会に参加しました。本年会では、「Diversity in Toxicological Sciences for Sustainable Environment and Human Health」をテーマに細胞毒性や環境汚染物質、IT など幅広い分野の演題があり、海外からも多くの方々が参加されていました。ポスター発表や口頭発表に加え、シンポジウムやワークショップなど約 800 もの演題があり、どのセッションでも活発な議論が行われていました。企業展示ブースでは、約 100 社の企業が出展しておられ、最新の毒性評価技術や研究に役立つ情報を知ることができました。また、会場のすぐ隣には海があり、かりゆしウェアを着ている参加者の姿も見られ、沖縄ならではの南国の雰囲気も感じられる学会でした。

写真 1　学会会場前にて

・学会に参加した感想

＜水口 芹奈＞

私は、「Vildagliptin 誘発性肝障害の機序解明」というテーマでポスター発表をさせて頂きました。本学会には、企業で安全性研究に携わる研究者の方々がたくさん参加されており、普段はなかなか得られない視点からご意見を頂くことができました。また、異なる分野の研究者の方々とも議論を交わすことができ、今後の研究を進めるにあたり、新しい考えや気付きを得る貴重な機会となりました。シンポジウムや他の研究者の方々の発表を通じて、毒性研究の分野には、まだまだ多くの課題があることを再認識し、課題解決に向けた先進的な研究や技術に触れることができ、とても刺激を受けました。本学会で得た学びや気付きを自身の研究に活かし、より深く追究していけるよう取り組んでいきたいと思います。



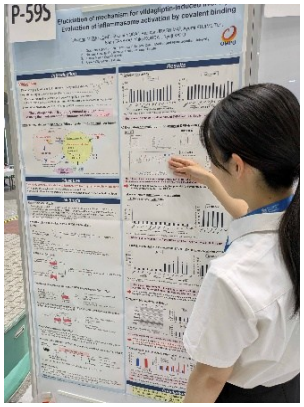
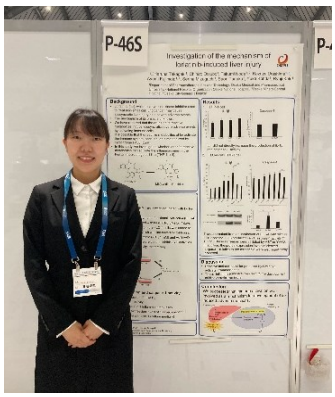


写真２　ポスター発表の様子

＜髙垣 春奈＞

私は「ロルラチニブ誘発性肝障害発症機序の検討」というテーマでポスター発表をさせていただきました。初めての学会発表で緊張しましたが、先生方から指導いただき無事発表を終えることができました。質疑応答では企業や大学の方から質問やご意見をいただくことができ、自身の研究の理解を深め、課題を見つけることもできました。今後の研究や卒論の作成に活かすことができる有意義な経験となりました。シンポジウムでは各分野の研究者の発表を聞くことができ、難しく感じましたがとても勉強になりました。



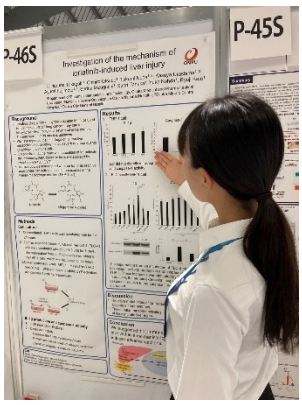


写真３　ポスター発表の様子